

第二百九十六回 青葉会

平成二十二年十一月二十五日(木) 午後六時〜九時

丸紅一階レストラン バンケットルーム

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉 大林猛 小川恭延 小西弘子 豊田ゆたか 中山芳博 橋口隆 福島正明 山崎亜也

山内天牛

〈投句〉 伊賀山そらお 石川清 今井紀久男 柿崎忠彦 朱牟田恵洲 土谷堂哉 中野一灯

南平和夫 宮内規雄 渡邊盛雄

赤田堅 今井紀久男 川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 村田くに子

山崎青史 山本三恵

《選者吟》

ロボットが地団駄を踏み日短かし 万里子 (弘・允・正・清・天)

積りゆく紅葉(もみぢ)や黄葉(もみぢ)猫の墓 全 (猛・弘・亜)

速夜から帰る我が影冬の月 全 (孤・く・天)

外套のポケットへ手を誘(いざな)はれ 全 (紀)

小春日や隣家に伸びし枝を刈る 全 (ゆ)

ゴシツクは選者の天

《互選句》

七点 山寺の石段高し秋時雨

☆ 熱爛に祝(ほ)ぐ老友の処女句集 そらお (孤・敏・隆・允・正・く・三)

足の爪丹念に切る三島の忌 (青：足の爪と三島の忌の取合せに意外感があり面白い)

地の精と静かに出会ふ茸狩 恵洲 (万・龍・ゆ・隆・正・く・三)

五点 2センチを編んで形見の糸糸玉 弘子 (恭・ゆ・允・正・三)

(☆：漢数字が良い)

海鼠腸(このわた)や天涯孤独を気取る酒 亜也 (万・堅・弘・ゆ・青)

(青：酒呑みは独りぼっち。よく分る)

四点 ☆ 語彙(こい)徐々に減る自覚あり冬の菊 恵洲 (万・隆・く・青)

(青：全く同感)

☆ 鮫鱗や蒼茫の海を背に吊らる 芳博 (万・猛・孤・く)

☆ 短日や庭師のはさみアレグロへ 全 (万・敏・正・亜)

(☆：アレグロが良い)

☆ 焼藪を食べる子の背にヴァイオリン 天牛 (万・ゆ・允・正)

酒止めて何の余命か枯葎 盛雄 (堅・紀・猛・龍)

岩倉・実相院

三点 開け放つ床(ゆか)に写りし冬紅葉 紀久男 (堅・猛・弘)

☆ ふるさとの甘柿二つ朝の卓 ゆたか (万・堅・孤)

☆ クレーン立つ歌舞伎座跡や冬の月 一灯 (万・恭・允)

冬日向左の脳から溶け始む 正明 (紀・恭・允)

☆ 冬の雷女を泣かせてはならぬ 全 (弘・隆・三)

透明になるまで木守柿でいる 全 (万・青・天)

(青：仮名遣い、もし旧なら、「いる」↓「ある」。上手い！木守柿のありようが見事にとらえられている)

たくあんの皮を齧るも禪機かな 亜也 (紀・敏・天)

二点 筋雲(すぢぐも)をちぎって冬の空青し 清 (紀・龍)

桜紅葉大地に乞われ舞い降りる 猛 (堅・恭)

一点

妻流に慣らされ風呂吹味噌の味
萎れ花捨てて秋の日退院す

孫曾孫困む棺や冬の朝

木守柿明日香広広暮れゆけり

(☆↓広々と明日香暮れゆく木守柿)

霧しぐれ杭に膨るる海の鳥

(青：海鳥の習性をよく観察している)

ポインセチアいつも火種を抱え居り

☆お椀ごと団栗大事に拾ひけり

紅葉に虹懸りけり恐山

ぼつかりと歌舞伎座失せし冬景色

(失せし↓抜けし)

廃校となりし高校黄葉す

樹樹の影透かし真紅の秋落暉

去年より外套重く気合入れ

山茶花や叔母には叔母の若き日々

襷(たすき)して歩む老人冬ぬくし

澄み渡る湖面の富士に散る紅葉

わだかまり鮫鱈共に食われけり

秋深し余命告げらる友の部屋

照紅葉レトロの街に石畳

☆ゆさゆさと揺れる大樹や木の実雨

狂い咲きはにかみ笑ふ躑躅(つつじ)かな

面取らで投げ入れしまま蕪汁

リセットし小(こ)し(しょう)に戻りて熊手買ふ

霜月の霜におびえる農夫かな

拆を入れて商売繁盛熊手市

忠彦 (猛・龍)

全 (紀・亜)

弘子 (紀・天)

堂哉 (恭・敏)

芳博 (孤・允)

一灯 (孤・青)

正明 (隆・三)

天牛 (万・亜)

そらお (芳)

紀久男 (芳)

恭延 (龍)

全 (紀)

忠彦 (隆)

弘子 (芳)

全 (猛)

ゆたか (紀)

芳博 (龍)

隆 (紀)

和夫 (紀)

規雄 (万)

全 (紀)

亜也 (ゆ)

全 (芳)

天牛 (芳)

全 (く)

●次回青葉会

十二月九日(木)

恒例師走寄席見物↓年忘れ句会

正月四日(火)

末廣亭昼の部

丸紅一階談話室

吉例初芝居見物

新橋演舞場 昼の部

一月二十七日(木)

初句会

午後六時〜九時

丸紅一階談話室

▲当季雑詠各自五句。

投句は二句

以上文責

紀久男

平成二十二年十一月例会

一、今回は万里子先生以下10名出席。投句も10名。紙上選句9名でした。
先生の零余子（むかご）握り飯、弘子さんのおかき（豆源）、亜也さんの地酒等を飲んで食べて弘子さんの司会で順調に進行。御覧のようにそらおさん恵洲さん盛雄さん芳博さんが高得点でした。

二、関係者近詠

いいひとと言はれ肩凝り秋暑し	万里子	病床の妻に冷たき林檎剥く	規雄
祖母と犬乗る車椅子秋に入る	全	〔「NHK俳句」12月号 片山由美子選〕	
色変へぬ松に目守られ童心居	全	憂国の熱き思ひや実南天	允章
余生こそ夢をかたちに秋高し	全	〔松下村塾〕	
朝顔やタワーの下の露路暮らし	眞希子	焼牡蠣を啜れば日暮早きかな	全
はめ殺しのホテルの窓より鯛雲	全	落葉焚き叶はぬ小庭町住まひ	恵洲
座すのみの会議に疲れ冬瓜汁	全	小泉八雲も見し宍道湖の冬夕焼け	全
ロートレツクの赤褪せてをり夜の秋	弘子	鳥肌の立つ脱衣室冬に入る	全
看取りなど無かつたやうにつくつくし	全	〔大鉄会11月〕	
満月のまん丸といふ重さかな	全	初雪のまばらに残る雑木山	允章
ひと時は萩の抱きたる風となる	全	噴煙の浅間嶺はるか紅葉山	全
糸に乗る播磨屋一家の秋芝居	紀久男	溪を縫ふ吾妻（あがつま）線の冬紅葉	紀久男
甲羅干す亀の見上げる天高し	忠彦	雪吊りの宿に謎めく女客	全
百貨店出づれば釣瓶落しかな	恭延	〔草津吟行〕	
夕づくやかすかに聞こゆ祭太鼓	和夫	みちのくの霜降る闇を終列車	一灯
大鉢からあふれんばかりの月見草	全	雁の棹サイロの空に崩れけり	全
		追悼の弥撒につらなる小春かな	五郎太

―『萬緑』12月号―

三、芝居俳句：昨年一月から始まった歌舞伎座建替えの為のさよなら公演は最後の四月「助六」で最高潮。マスコミが煽ったこともありすごい人出でした。今年目についた役者及び関係者の句と俳人の歌舞伎を詠んだ句を紹介します。

江戸の粹立つる霞や河東節	市川團十郎	春惜しむ手締め音や木挽町	飯田龍生
花乃雨川辺に積りし登きの帯	全	一礼し歌舞伎座去りておぼろ月	村上八重美
		春シヨール畳み最後の歌舞伎座へ	山田啓子
〔登き〓朱鷺〕		高足のタツプダンスや花の雲	小澤克己
うららかやむきみに映ゆる大目玉	坂東三津五郎	結末の刃傷ざたや春雲	全
花道に男が消えて春の闇	全	年歩む黒衣の我を置きざりに	西村和子
春寒にかつぎの足のなほ白く	全	主役より脇役たたへおでん酒	全
こしかたの思ひを胸に夏芝居	松本幸四郎		
		〔「勅進帳」弁慶を国内全県で演じて〕	

○ 神様出雲へ研修旅行？それとも揃ってバケーション

恵洲

〔NHKラジオ折込都々逸「か・け・そ・ば」〕

平成二十二年十二月六日